

Short-term outcomes of the transvaginal minimal mesh procedure for pelvic organ prolapse

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高澤, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002036

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1867 号

One-year outcome of the trans-vaginal minimal mesh pelvic organ prolapse repair without using commercially available kits

(minimal mesh TVM 手術 1 年目の有効性と安全性に関する検討)

高澤 直子 (たかざわ なおこ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、骨盤臓器脱に対する経膺メッシュ手術は再発率が低いものの合併症報告も多く、経膺的なメッシュの使用のあり方が問われる中、メッシュの有用性を最大限に生かし、かつ合併症を極力回避できるように、メッシュの形状を従来使用していたものよりも 56% 縮小し、閉鎖孔を通さないメッシュを使用した手術方法での有用性を検討した論文である。我々が作成したメッシュ型は 5×7cm 大の半円形の形状に 2.5cm 幅の 2 本の脚がついた形状で、閉鎖孔を通さずにメッシュ脚を前膺創からのアプローチで島田ニードルを用いて仙棘靭帯に貫通させた。メッシュの形状を小さくすることにより剥離面積が少なくなり、そのことは術中、術後の合併症を回避することにもつながる。さらに島田ニードルを使用することで、海外で使用されている既存のメッシュキットでメッシュアームを固定する際よりも小さな剥離でメッシュ脚を前膺創から仙棘靭帯に貫通させることが可能であり、周囲臓器損傷や術後の排尿障害を少なくしていることにつながったと考えられる。従来、仙極靭帯へのアプローチは後膺壁の創部から行っていたが、前膺壁からアプローチすることにより剥離操作に伴う直腸損傷のリスクを回避でき、手術時間の短縮などにもつながる。前膺壁からの仙棘靭帯への到達するこの方法は、膺前壁の下垂と膺断端の下垂がそれぞれ重症であっても同じ創から同時修復を可能としている。術後 1 年目の成績を検討したが、stage 2 を再発の定義とした際の再発率はこれまで大きなメッシュを使用した手術の成績と同等であった。再発に関する検討では BMI のみが再発に関連し術前の重症度は関連認めず、このことは小さなメッシュでもレベル I の牽引が確実であることにより重症な臓器脱の修復を可能としたことを証明したと言える。また、問題視されているメッシュびらんや痛みの発生率は非常に低い結果を示した。

このことから、我々の用いているメッシュの形状と手術方法は骨盤臓器脱に対する治療法として有用な方法であると考えられる。また、我々の方法を用いればキット製品を用いなくても、有効性が高く合併症の低い手術が可能である。このことは本邦のみならず高価なキット製品の使用ができない後進国においてもメッシュと再滅菌可能なニードルがあれば重症臓器脱の治療が可能であり非常に臨床的に意義ある論文であると考えられる。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。